



中里恒子全集

第十一卷

中里恒子全集 第十一卷

定価二〇〇〇円

昭和五十四年十月十五日印刷
昭和五十四年十月二十五日発行

著 者 中里恒子

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七九

目次

歌枕

3

黄獨楽

137

うつまぼろし

167

とらんく商人

199

鴛鴦

233

残月

263

此の世

285

終身

311

夢の木

347

わ
が
庵
あ
と
が
き
解
題

401 399 377

歌

枕

もの言わぬ花	花 筐	歌 枕	裾 野	隠れ 蓑	目 次
--------	-----	-----	-----	------	-----

隠れ蓑

だいぶ水をくぐったらしい冴えた藍の、くたくたになった薩摩飛白に、みじんの筒袖の半纏を着て、ねずみ色によごれたズックの運動靴を履いて、肩から麻の頭陀袋をかけた男……眼深かにかむった烏打ち帽の下からみえる半面は、皺の深い、老人の相だが、がしがしした歩きつきである。

好事家の蒐集品をならべた會場で、織部の手鉢の前に立ちどまっただけで、仔細あり氣に、眼をすり寄せている数人の人をよけて、すたすたと出ていった。

出會いがしらに、打つかった男がいた。頭陀袋をみて、「おや、」と立ちどまる。

「鳥羽さん……」

低い押しつけるような声で言った。鳥羽と呼ばれた男は、一瞬、呼んだ男を見据えた。それから柔かい顔つきで、にじり寄り、

「ああこれは曾我さんで、どうも長いこと、」

「しばらくでした、時どき、噂は伺っておりましたが……」

「どちらへも伺わず、いや、もうくすぶっておりますです、」

懐しそうに言うが、こういう場所で、知人に出會ったのを、氣まずそうに顔をしかめている。声をかけた男は、ちよっと、衝立の陰へ鳥羽といっしょに身を寄せて、

「たまには出てらっしゃるんですね、古巣と言われるところにも、」

「いまだに、俗っ氣が抜けきれず、うろついてますですよ……なんにも欲しいものはありませんが、ただ今は、犬が五匹いましてな、その犬の食料に追われてる始末で、」

「ほう、五匹ね……犬でも集め出すと、五匹ということになるかなあ、」

「……犬はお飼いになったことがおありかな、曾我さん、あなた、名魚を持っていらしたじゃ、ありませんか……」

曾我は、忽ち、手を振った。

「それは、束の間のことで、とっくの昔になくしましたよ、」

「犬もな、自分で餌をやって飼わなくては、情がうつらん、魚だってそうでしょうが、犬という奴は、寝起きをとみにするので、格別ですわ、食べるわ食べるわ、人情で、たまには、うまいもんを食わせてやりたい、それで、時折、支店をまわって、店の残りものを貰ってくる始末なんです……」

「へえ、あんたがねえ……お住いはどちらです、」

「つまらんとくすぶってますわ、いずれ、一度、會社の方へ参上して……」

「どうぞ、犬のついでにお寄り下さい……鳥羽さんが、引っ込んで、さびしくなりましたよ、」

「左様、名器よりも、犬の方がよくなっちゃあ、形なしです、いずれ……御免下さい、」

いかにも着馴れた筒っぽと言ひ、着流しの上にかけた、僧侶のような、古い頭陀袋と言ひ、履き古して、幅広な足の形なりになっているズック靴と言ひ、使いこなした手ずれのしたいでたちで、着飾った人びとをくぐり抜けて行く。

曾我は、鳥羽が、忽ち、影も形も見えなくなるまで立っていた。

「……たいしたもんだ、」

ひとり、つぶやいた。

鳥羽の、あたりかまわぬ風采は、なれの果てというよりも、くぐり抜けた変轉のゆきついた、さわやかな境地とも見える。

「もう、そこを動かないときめた姿だな、あれは……」

曾我は、そこがどこであろうと、ひと癖あった男が、なりふり捨てて、犬の餌を貰いに歩かうしろ姿を見送った。

屋の會食を済ませて、曾我が社に戻るとまもなく、秘書が、鳥羽の來訪をとりついだ。
「ああ、知ってる、お通し下さい、」

會我は、先刻、ばったり出會った鳥羽が、もう、ここへ顔を出すという素早さに、相変らずの性根を見た。どちらも盛りの年代に、戦後の、どっと蔵から出た名品珍品を追って、血まなこに道具屋まわりをしていた頃、鳥羽とは好敵手で、會我が、一息ついてゐる間に、さっと浚ってゆくのは、いつも鳥羽であった。思いこんだら、矢も盾もない、というその素早さである。度胸もいいのだ。

「……早速に参上しまして、やっぱり、あなたのお顔をみたら、洗い浚い、ひと通りはきいて戴かなくちゃ、虫が納まりませんで、」

「その手で、よくやられたなあ、」

「わたくしも、煮え湯を飲まされたことがありました、ひと足違いで……ひと足どころか、半歩の差で、あなたに、小次郎の鼓胴をとられた……貝^{のぼ}尽しの、いいもんでした、」

「もう、お互いに峠を越したね、あんな脳溢血寸前の、逆上^{のぼ}ようはもう出来ない……だけど鳥羽さん、素早い現われ方をみても、お変りないのでしょうな御身辺……」

「いいえ、あの頃のもの、きれいさっぱり、なくしました、恥をお話ししても、あなたには、ほんとのところ……なにしろ、京都の店は、やりそこないました上に、例の一件で、蔵の鍵をとられてしまつて、何一つ出して貰えず、それっきり、とりあげられて、それが、縁の切れ目になりました始末ですから……」

「そうだ、そのとき、あなたから、こまごまと、駄^だけ込み訴えの手紙を貰つた……ちゃんと、つてある、」

「一文なしにはなる……好きで入れあげた女には逃げられる、しかも、蔵ごとですからな……こたえました、」

「その手紙に、言い訳が書いてありました、お貸した、伊賀の耳付きの花入れ、それをこれこれのいきさつで、お返し出来なくなった、という、縷縷たる胸のうちが述べてあって……美人を手放した悲しみ以上に、あなたの気持の切なさが、実によく出ていましたよ……だから、それきり、わたしも、あの花入れは大事だったが、ひと言も、言っていない……すぐ、諦めた……」

「今でも、申しわけなくて、身が縮みます、」

曾我は、話題を変えた。

「犬を五匹飼ってるって……」

「犬と言えども、五匹となると、わたくしたちのかかりと匹敵するくらい、食べますな、」

「犬屋でも始めようというわけではないでしょう、用心にしても、多いね、」

鳥羽は、笑いながら、

「わたくしは子供がありませんが、以前は、子沢山の、貧乏ぐらしの家族をみると、あんなにこしらえなければいいに、と思ったもんでした……だが、大勢いても、貧しくても、捨てる子供はいませんわ、みんな、育てますわな……犬なども、なんとはなしにふえて、困ったと思っても、情がうつって、捨ても出来ず、なりゆき委せで……いずれは死ぬでしょう、それまではということでございます、」

曾我は、うなずいた。

……身から出た錆びと言っているが、東京でも一流の場所の、名うての老舗の割烹店の主人が、犬の餌を貰うために、昼^{ひる}日なか、煙^{けむり}たい細君の坐っている自分の店や、しっかり者の妹の手になる支店をまわって、リュックで担ぐくらいの残滓を集めるというその気持は、やっばり、名品をねらっていた頃の、見栄も外聞もない、思い立ったらひとすじの情熱をしのばせる。

「なにかに、夢中になっていたい人だ、あなたは幾つになっても、」

「へえ、因果ですわ……それに、身のまわりをしてくれる者が、大好きなんで、殆ど、ひとづきあいのない侘住みですから、犬は、半分、その女の玩具においたのですがな、今じゃ、わたくしが手ばなせません……血統書の、毛並のという犬ではありませんで、雑種ですわ……シロとか、クロとか、アカとか、ボチとか、マダラとか、そのまま呼び名にしておりますんで……」

鳥羽は、一時間あまり話していった。

「……したいことをして暮していられるのだから、羨しいな……」

「着物に運動靴というのは、らくですわ、下駄なら、履き古して、板のようになった奴、なあに、おかしいと言われましても、自分の暮し方ですからな、」

自分の暮し方、鳥羽は自信あり気にそう言った。そうだ、これよりほかになにがあるのだ……鳥羽は、店の冷蔵庫にあずけてある残滓を受け取ると、がしがしと駅の階段をのぼった。

花冷えの雨と風が、代る代る降ったり、吹いたりした。宅地の中にぽつんとある庭桜は、もは

や散り敷いた。

「全く、あつという間だ、咲くまでは長いが……」

鳥羽は、胸中、花を愛惜しながら、花びらを掃き寄せる。きのう咲き出したばかりの木蓮も、強風で、厚い花びらを叩きつけられている。べったり土にまみれた桜吹雪のなかに、厚い、大きな濃い木蓮の花が落ちて、小袖の裾を見るような色あいになっていた。

雨があがると、道はすぐ乾く。海岸沿いの住宅地で、元は砂地なのである。客土をしても、水捌はよかった。

鳥羽の親の代には、このあたりは砂山で、高砂という、広い砂丘であった。

砂地にびっしりと、濃すみれが咲きむらがり、防風林の松林には、松露がいっぱい出た。……

鳥羽は、家業の休みの日に、店の者に連れられて、母や叔母と、ここへ松露とりに来た頃のことを、時どき思い出す。

鳥羽自身、死んだ母の年代を、とうに過ぎている。昔のことが懐しいというだけの、懐古的なものよりも、たかだか六十年ぐらいの間に、あれだけの砂山が跡方もなくなり、自分の身の上も、思いもかけぬ姿となって、箒で掃いている土が、わずかに砂地らしい名残りをとどめていることに、侘びしい感慨があるのだ。

月日は夢のようだというが、鳥羽は、夢だとは思わない。事実だと思いこんでいる。

箒の掃き目は、柴垣に添って、ぐるりと波のように続く。

龍安寺とか、円通寺とか、京に住んでいた頃見歩いた寺寺の、箒目の立て方を真似て、庭や道

を掃いたこともあるが、鳥羽は、結局、自分の手順で箒を使うことが、美しい綺目になることに気づいた。

龍安寺の白砂の波模様を、うちの庭で作っても仕様が……そういうことだ、と気づいたのだ。

松は、今でも昔の面影を残して、ところどころに群生し、庭木を代表しているが、遂ぞ、松露のとれた話をきかない。第一、松露と言っても、若い者は、げんな顔をする。……牛肉とか刺身とか言うような、それだけで格別うまいというものではないが、母は、松露の吸物が好きで、時季には、毎日でも作った。

菜種梅雨のうすらつめたい日には、鳥鍋に松露を入れ、歯ざわりのよい、こっくり味のしみた松露を、御飯にのせて食べる。……

「うまいもんだった……」

一度、鳥羽が、入れ揚げた女にその話をしたことがある。

「丸い、ころころした茸でしょう……売っていますよ、どうかすると……だけど、高いわね……あっさりしてて、お精進みたいなものでしょう、」

こともなげに言った。

「松の露とは、いい呼び方だな……」

「でも、松の露がかかると、毒だと言うじゃありませんか、そんなところに生える茸で、よく毒茸じゃないのね……」

鳥羽は、この女に、萬金を使って、自ら家を出るほどの逆上^{のぼせ}かたをしたことが、なにか、ぐつと胸に來た。

「松の露のかかるのは、よくないと言うだけのことだな……なぜ、毒なのかな、科学性があることなのかな……」

鳥羽は、それでも女が、こういう、妙な俗習を知っていることを、むしろ無邪気に思った。

「毒の露のおちる下に生えるから、毒茸か、まあ、おまじないみたいな信じ方だ、」

こういう女であるから、疑り出したら、とても手のつけられないことになって、それで別れたんだ……と、鳥羽は、そんなことも、はっきり覚えていた。

松露の沢山手にはいったときは、うす甘く醬油で煮つけで、深鉢に、ころころと玉のように盛りつけた膳の上の、春も終りの、しんとした茶の間の夜が、より一層あざやかに思い出される。

……

この地所は、砂地だからと、家は建てず、小さな休み所ほどの小屋をおいて、ずっと防風林つづきの松林にして放ってあった。当時、町なかから、遊びに來る保養場として、一年に一度來るぐらいのことで、こんな場所に、いくら年を取ったからって、住めるもんじゃあない……と、母さえも言っていたのに、どうだろう、今、自分は住んでいるのだ。

鳥羽は、そんな、五十年、六十年前のことが、ふつふつと眼にうかぶ。

この土地にまつわる記憶が、いやにはっきりしているのは、どういうわけか、立派な宅地と変ったあとでも、一部売り残った、地なりの悪い百五十坪足らずの地所が、これと言って頼る田舎

のない町育ちの鳥羽一家にとって、戦争中は、恰好の疎開場所になって、行ったり来たりしていいたせいでもあろうか。

その頃、すでに砂浜は、海岸寄りに残っているだけで、昔からの大きな別荘のまわりに、住宅が建ち並び、月見草、浜豌豆が、砂地の道に咲きみだれ、強風に、砂が痛いほど吹きつけた。

鳥羽の代になって、この藤ヶ谷へ、雨露をしのぐだけの、寄宿舎のような二階家を建てた。一家眷族、店の者たちの用が足りる程度の家財道具を運んで、やり難くなった店の方は、配給の標準なみに開けているだけで、個人の客よりも、會社専属の形になっていた。

鳥羽夫婦には、子供がない。

細君は下町の薬種屋の出で、水商売のみの字も知らぬ女だが、しっかり者で、むしろ、色氣のなくなった商売の氣風には、向いていた。命じられ、定められただけのことを、ばきばきと、過不足なくやるからである。

どうしても、氣分の、好みのと、はみ出したがる鳥羽以上に、店の者を計算通りに使い馴らして、老舗の店を牛耳ることができていた。

客商売と言っても、細君は、めったに客席へは出ない。才走ったところも、垢ぬけたところもなく、笑っては損だというような、いやいやの笑顔でも、根が、世辞のないだけに、そんな笑顔でも利いた。

人あたりのいい、すぐにも、ひと肌脱ぎたい氣風の鳥羽よりも、無愛想な細君がむしろ頼もしがられる。三十半ばすぎてから、ぶくぶくと肉が付き、鳥羽よりも、上背のある大女になった。